

姫路空襲のこと

橋本茂光（当時、姫路市在住、6歳頃の話）

私の実家は姫路市塩町です。被災した時、幼稚園児で年齢は6歳でした。

姫路空襲の前日は、福崎の父の実家の田舎にいました。その夜20時ごろだったと思う。ドカーンと大きな音にびっくりして外に飛び出ました。東の空にまるで大きな太陽がでたのかと思うような異常な光景でした。その後真っ暗な夜空に青白い不気味な光が落下していきました。その光は焼夷弾だったのです。何もわからない私は「きれいやなあ」と思っていました。

姫路空襲のあくる朝8時ごろ、汽車に乗って、福崎の祖父と母と私の3人で被災した実家へ帰る途中、京口か野里までしか動いていませんでした。

道路は焼け残った材木やいろんな物がくすぶって異臭を放っていました。それらの上を、我が家を探しながら一途に歩いていました。周りを見渡しても跡形もなく消失していましたが、鉄筋コンクリートの建物だけがポツンポツンと焼け残って建っていました。

人が通れるようにとみんなが協力して道を拓けていました。その道で町の役員さんに出会って「みんな元気で無事でよかったなあ・・・」と言ってくれました。うれしかったのを覚えています。

隣保の人達や色んな人が雨をしのぐバラック小屋（長さ6m・幅4m・深さ80cm）へ連れて行ってもらいました。大勢の人の中で子どもは私1人だったように思います。他の子どもたちはどうしているのだろうと思いました。

そうこうしているうちにすぐ昼が来ました。シェル貝の殻をお皿がわりにして、おむすび1個とトマト1個が配られました。私はおむすびを「もっと食べたい」とねだったところ、母に叱られはしましたが、その後母はおむすびを半分にして私にくれました。

自宅が見つかり、土間に掘っていた防空壕を掘り返しましたが、出てくるものは熱で変形したり、ガラス製品はビードロ化して役に立ちそうなものはなにもありませんでした。深い井戸には貴重品を油紙で幾重にも巻いて埋めていたが、あまりに深かったので掘り出せませんでした。

祖父の話では家の周りに7つの焼夷弾が落ちていたということでした。そのうちの1個を持ち帰って十能（※炭や灰を運ぶ小さなスコップ）にしたらいいと思って汽車に持ち込みました。すると車内のお客さんに「そんなもの持って帰ったら叱られるで」と言われたので窓から捨てました。

多くの生命や財産が失われ、それぞれの人生が大きく変わったと思っています。戦前、塩町で楽しく遊んだ幼な友達のことを懐かしく思いふけている今日この頃です。